

# 学びから得た「障害」についての理解

## 学生による自由記述からの考察

関谷眞澄

The Understanding on “Handicap” that having by Education  
The Thought on Free Writings of Students

Masumi Sekiya

### 1. はじめに

私たち人はこの世に生を受けて死に至るまで、様々なできごとに出会う。そのなかには病気や事故、など時として自分の心身を危うくするできごともある。わずかなタイミングで難を逃れていることもある。しかし私たちは安全な日々が当たり前のことであると思いつこんでいる。健康に生まれることが「普通」であり、多少の病気やけががあっても一時的なものであるように思っている。だが果たしてそうなのだろうか。

「健康」「五体満足」という状態は実は幸運な偶然ではないだろうか。

妊娠、出産は本来母体と胎児へのリスクを伴った過程である。ある意味、いのちを賭けて、新しいいのちをこの世に送り出す過程である。「五体満足」に生まれることは当然のことではない。また寿命をまっとうできること、健康な心身で生活していけることも「当たり前」のことではない。それはあたえられた「幸運」であろう。

「障害児」「障害者」の家族や身近に障害を

抱える人がいてかわりを持ってきた人の意識はまた違うだろうが、「健常者」と言われる人たちにとって、自分が障害を抱えることは実感としてなく、「人ごと」であるように思われる。

筆者は本校で「障害児保育」を教える機会をいただいている。学生一人ひとりが「障害」について「人ごと」としてではなく、考えていけるようになることが、障害を抱えることもや保護者への援助に必要であり、「障害児保育」という科目の目的の一つであると考えている。

「障害」「障害者（児）」という言葉に、その存在に、いまだ「偏見」はついてまわる。自身のうちにある「偏見」を自覚している人ばかりではなく、むしろ少数であるかもしれない。「偏見」がある限り、「障害」は排除したいものであり、「人ごと」としておきたいものになってしまう。障害児保育にかかわる学生にとって、「学び」が自分自身の「偏見」に気づき、向き合う機会にしていきたい。

本稿では、「障害」について学生が持ってい

たイメージや意識がどのようなものであったか、1年間の授業を通じてどのように変わっていったか、という問いかけに対する学生たちの自由記述をもとに「偏見」に焦点をあて、認識の変化と学ぶことの意義を考察していく。

## 2. 障害児保育とは

### 1) 障害児保育の対象

#### (1) 制度としての成り立ちと受け入れ要件

現在のように地域の保育所において制度のもとに障害を抱える子（以下、「障害児」と記す）を受け入れるようになったのは、1974年（昭和49年）に障害児保育事業実施要綱が出されてからである。この要綱により、障害児の保育所入所が正式に認められた。

しかしこの要綱では、対象児はおおむね4歳以上、障害の程度は集団保育が可能であり毎日通所できる軽度の障害状況であること、家庭として保育に欠ける状況であること、などの要件があった。また受け入れる保育所は指定されていた。そのため、中程度、重度と診断されたこどもや、軽度であっても集団になじまないこどもや、何らかの事情や事由で毎日の通所がすぐには困難なこどもは、保育の対象とされなかった。また対象と認められたものの指定保育所が遠く、通えないという現実も生じた。

その後1978年（昭和53年）に厚生省から改訂がなされ、「保育所における障害児の受け入れについて」が通知された。修正された内容は以下である。

対象年齢は制限なしに、障害の程度は中程度までに（ただし集団生活が可能で日々通所

できるもの）、受け入れ施設に関しては要綱ではおおむね90人以上の保育所という指定方式であったが、人数規定（施設の規模）をなくした。定員の1割程度とされた障害児の受け入れ人数も規定なしとされた。保育形態も「混合保育」（統合保育）をとることが明記された。また受け入れる保育所にも助成措置がとられた。

就学前の幼児が日中通う地域の場合として、他に幼稚園があげられる。幼稚園は文部科学省の管轄下学校教育法に基づく施設であり、正確には保育ではなく、「障害児教育」の場である。しかしその理念は「障害児保育」と同じであろう。幼稚園では同時期、1974年（昭和49年）から私立特殊教育補助として補助金が出され、主に私立幼稚園で障害児の受け入れがなされていた。その後公立幼稚園でも受け入れている。なお学校教育法に基づく障害児教育の場として特別支援学校の幼稚部がある。

#### (2) 受け入れの要件における問題

1978年に見直し、修正がなされたものの、受け入れの要件を障害児の「育ち」や「保護者の子育て支援」という面から見直すと、いくつかの問題が残る。

ひとつには対象とされる障害の程度や特性、状況の問題である。

中程度以上とされているなかで、重度とされる子どもたちの保育をどこで保障するかという点があげられる。それには障害児通園施設が考えられるが、現状において十分な数とはいえない。また集団生活が可能か否かは通ってみないとわからない面がある。その集団

になじむか否か、「できる」こと「できるようになること」がどのくらいあるかは、保育の場でかかわっていかないとわからないし、変わってくるものでもあろう。もちろん心身の機能面で集団保育ではその子の健康の管理や十分な指導、機能回復へのアプローチなど、適切な援助が困難であり、分離保育や療育が適している子どもたちもいる。

その判断をより専門性をもって慎重にしていかななくてはならないだろう。知能検査で測られる知的能力と生活能力がイコールとはいき切れないことも念頭におき、その子の集団への適応力とその可能性を判断していかななくてはならないだろう。

次に「保育に欠ける」という要件を満たすことが難しいこともある。

障害児に限らず、障害を抱えていない子（以下、健常児と記す）においても保育所入所の最も大きな条件は「保育に欠ける」家庭状況であるか否か、である。そして「保育に欠ける家庭状況」の第1にあたるのが、母親の正規就労であろう。母親が「家にいない」状況が優先される。母親が家にいても、例えば、高齢者の介護、病気の家族や親族の看護、夜間の仕事の従事者、等の場合、実際には「保育に欠ける家庭状況」である。だが母親が就労している場合にくらべると、優先順位は下がる。そして障害児の母親の就労は、こどもの世話の大変さもあり、なかなか難しいのが現実である。

3点目に、「心身に障害のある子ども（障害児）」がいる状況も、「保育に欠ける家庭状況」であるが、その際対象とされるのは、障害児

のきょうだいである健常児であるとされることもみうけられる。障害児の育児の困難さから生じる「保育に欠ける家庭状況」は、健常児にも障害児にも同様である。「こどもの発達を支える」という保育の目的からすれば、きょうだいそろっての入所がなされるべきである。<sup>註1)</sup>

4点目に、「障害児」と診断されていないがより配慮と援助の必要な子どもや家庭への対応の問題である。発達障害が疑われる子どもや知的にボーダーラインの子ども、被虐待児など、気にかかる子どもが増えているように感じられる。このように手をかけなくてはならない子どもたちの保育に対してどのように助成がなされているのだろうか。

障害児保育という看板は掲げられたものの、十分な機能は果たしているのだろうか。

### （3）保育現場での問題

「障害児保育」は統合保育（1974年の障害児保育事業実施要綱と1978年の改訂では「混合保育」と表記）であることが掲げられている。しかし実際には部屋やクラスから別であったり、クラスや遊び場は一緒であっても健常児とのかかわりのない状況、分離した状態がみられるようである。分離した状態がその子にとって「発達」という観点から必要であり、いまの時点で有効であるという確かな判断に基づいての対応であるなら、それも良しであろう。しかしその点はあやふやなままでの対応であるのではないだろうか。

また発達障害児への対応の難しさがある。「発達障害」の診断の難しさや一人ひとりの多様性から、どのようにかかわっていったらいいのか、職員の戸惑いが大きいままであるよ

うに思われる。「発達障害」自体がまだ充分理解されていないのが現状であろう。そのため適切な配慮や指導がなされているかは、保育の現場で担当の保育士の力量にゆだれられてしまう。それは支援として非常に不確かで不安定な状態であり、援助の一貫性や継続性に欠けるかわりとなってしまえるだろう。

さらに根本的に現場での保育士の数の不足が大きいのではないか。障害児の援助には障害への専門的な知識を持った経験を積んだ保育士が必要である。その数と、やはり現場で子どもたちにかかわる保育士の人数が全体的に少ないと思われる。

「障害」と診断されていないが気にかかる子ども、また健常児のなかにもその都度手をかけた配慮や指導が必要な子どもは多くいる。そのような子どもたちは「障害児保育」の対象と明記されてはいない。そのため制度での支援を保育所は受けられないことになる。

## 2) 障害児保育の形態と理念

### (1) 障害児保育の形態

障害児保育の形態には分離保育と統合保育がある。分離保育とは障害児のみの集団での保育形態である。統合保育とは健常児と障害児が一緒にいる、混合の集団での保育形態である。

分離保育と統合保育、障害児の発達支援において、それぞれメリット（利点）とデメリット（充分とは言えない点）がある。

分離保育は障害児通園施設や特別支援学校の幼稚部でなされている。分離保育の一番の利点は、保育士以外に障害のことをよくわか

っている専門職や医療職が保育に加わっていることである。また医療機関ともつながっている。専門的な訓練や、医療上の管理や治療が（継続的または随時）必要なこどもに対応できる。しかし施設の数としてまだまだ少なく、利用したくても近くにないことや、定員の関係で利用できない状況がある。また住居のある地域のこどもたちとの交流が途絶えてしまうことが多い。

地域の保育所や幼稚園での障害児保育は、統合保育とされている。統合保育の目的でもあり、重要な支援となるのは、健常児との交流である。「ともに育ち合う」ことを目的とし、その効果は大きい。ただし障害に対する専門性という点では充分ではなく、保育士以外の専門職はあまり配置されてはいない。

分離保育と統合保育、どちらが良いとは一概に言い切れない。障害を持つその子の障害特性や性格、保護者の考え、家庭の状況、などを考え併せ、先の見通しを持って判断していくべきであろう。

### (2) 障害児保育の理念

ノーマライゼーションは統合保育をおこなううえで重要な福祉理念である。

ノーマライゼーションの理念について障害者福祉論のテキストでは下記のように説明されている。以下抜き出して記載する。

一ノーマライゼーションの考え方は、デンマークの「1959 年法」が述べている。「知的障害者のために可能な限りノーマルな生活状態に近い生活を創造する」という精神が基礎になっている一（『障害者福祉論』p6）。

なお、「1959 年法」はデンマークで 1959 年

に制定された「精神遅滞者ケア法」のことであり、ノーマライゼーションの理念が最初に文章化されたものであると言われる。前出のテキストでは次のようにも説明している。

―同法は、障害者に「できるだけノーマルな生活状態に近い生活をつくりだすこと」というノーマライゼーションの理念を掲げた」（『障害者福祉論』p70）―

この理念を基に障害の有無にかかわらず、同じ保育の場でともに育ちあうなかでともに成長していくことを重視し、その発達を促す保育を目指しているのが、障害児保育のひとつの目的であろう。

### 3. 障害児保育という科目の目指すもの

障害児保育は、厚生労働省において保育士養成課程のなかで「保育の内容・方法に関する科目」に位置づけられており、通年の授業科目である。そして科目の目標として、下記の5点が掲げられている。

その内容をみると、障害のあるこどもの発達を支えることが目標の3で掲げられている。そしてその保護者への支援が4で掲げられている。保護者への支援には「障害の受容」が鍵となる。障害児の発達の援助、保護者の子育てへの援助、そこには「障害の受容」への援助が欠かせない。それが適切になされるためには、援助者となる保育士が「障害」について理解と知識を持っていることが必須である。そのことが2に示されている。

#### <目標>

1. 障害児保育を支える理念や歴史の変遷について学び、障害児及びその保育について理解する。
2. 様々な障害について理解し、子どもの理解や援助の方法、環境構成等について学ぶ。
3. 障害のある子どもの保育の計画を作成し、個別支援及び他の子どもとのかかわりのなかで育ち合う保育実践について理解を深める。
4. 障害のある子どもの保護者への支援や関係機関との連携について理解する。
5. 障害のある子どもの保育にかかわる保健・医療・福祉・教育等の現状と課題について理解する。

多様な障害のそれぞれの特性を知識としてわかっているだけでは、表面的なマニュアルとしての対応で終わってしまう。学んだことを経験とつなげていくこと、実感として捉えていくことが必要である。そして学びと実践のプロセスのなかで援助者と言われる者一人ひとりが自分自身の「障害観」を持つこと、持とうと自らに問い返していくことが、「専門職」の責任であろう。

筆者は「障害児保育」という科目を学ぶなかで、学生が「障害」を「人ごと」としてではなく、「誰にでも起こりうること」であり、「自分自身のこと」であると捉えられるようになること、そして「障害者（児）」という括りでみないようになってほしいと願っている。講義のなかで学生自身に自分ならどう感じる

か、どう考えるか、を問いかけるようにしている。

#### 4. 調査方法と目的

##### 1) 方法

通年の授業の終わりに受講生に下記の間を投げかけ、自由記述で返してもらった。その際研究として活用したい旨伝え、了解を得た。

##### (1) 記述内容（質問内容）

学生への設問は、以下のものである。

「障害を抱える」ということや、「援助」「障害とは何か」など、テキストや課題レポート（夏期休暇、冬季休暇）、講義を通じて考えたこと、イメージの変化など、自由に記述してください。

講義では「障害とは」というテーマで障害構造や「障害」の辞書的な意味、障害と個性をどう考えるか、などをとりあげた。課題レポートは障害を抱える本人の語りの書籍と、障害児の気持ちを親自身が綴った書籍を用いている。それぞれ夏期休暇と冬季休暇の課題とし、1000 字以上とした。

##### (2) 対象者

本校の H26 年度 2 学年生、164 名。うち男子学生 2 名である。保育士、幼稚園教諭の資格取得を目指す学生たちである。

##### (3) 実施時期

年間の授業終了時に実施した。学生たちは授業で学びと 2 年間の実習体験を終えた時期であり、卒業後の進路（就職）も大方決まった時期である。

##### 2) 目的

本稿では学生の自由記述のなかで、学生自

身が自分の意識の変化をどのように感じているか、「偏見」に焦点をあてる。

・講義やレポート課題、実習など、学びと体験によって、「障害」「障害者（児）」への偏見がどのように内省されたか。

・「障害」「障害者（児）」について「知ること」「理解すること」をどのように考えるようになったか。

・「援助」への意識についての記述への考察を行う。

#### 5. 結果と考察

##### 1) 結果

「偏見」という言葉は 32 名の記述にみられた。「差別的考え」という表現が 1 名いた。この言葉は設問に対し、「偏見」と同義で用いられていると考えても差支えないだろう。

他にも「偏見」という言葉は使われていないものの、内容として「偏見」に関すると思われる記述はあった。しかし「偏見」に関する記述か否か、筆者の主観をできる限り避けるため、「偏見」と「差別的考え」という言葉が入っている 33 名の記述をまず見ていった。

この 33 名のなかで自分自身が「障害」「障害者（児）」に偏見を持っていたこと、そして意識の変化についての記述がはっきりうかがえたのは 23 名であった。この 23 名の記述を分析の対象とする。

「一人ひとりの偏見」についての記述および目的に記した点に関係する記述を、結果として抜き出して以下に示す。

明らかな誤字、脱字は訂正し、文章が拡散して本人の言いたいことがわかりにくい

場合には表現をまとめた。基本的に表記は各々人の記述のままに記載している。

#### ①- 1

この授業を受けるまで障害をもつ人を少しこわいなと思っていた。障害の種類や特徴などもあまり知らず偏見もあった。しかし講義を積み重ねていくにつれて、障害をもったひとと関わり援助していきたいと思うようになっていて、自分でも驚いている。

#### ①- 2

この授業を受けるまで障害の人を見ていると、かわいそうだな…と差別的考えを少し持っていました。しかし授業で学んでいるうちに、障害者（児）に対する見方や考え方が変わり、その人が一番苦しんでいることを学びました。その時に自分は何をすべきか、何ができるのか、など自分にできること、自分の力を支えにしようと思うようになりました。

#### ①- 3

短大に入って障害について学ぶまで、障害について深く考えることはなかったし、偏見を持っていた。自分には無縁のものだと思っていたが、学習していくにつれ、考え方も少しずつ変わっていった。障害は私たちのすぐ身近に存在するものだと思うようになった。

#### ①- 4

“障害”についてどこか偏見を持っていたところが以前はありました。しかし1年間障害児保育の授業を通して、障害がどのようなものか、保育者として障害とどのように向き合っていくか等たくさん考えさせられました。そして夏休みには施設実習をさせていただき

実際に障害を持つ方と関わり、“障害”という言葉は決して人を差別する言葉ではないということ障害をもっている毎日を楽しく生活している利用者を見て、障害はその人にとっての個性の一つではないかと感じることができました。

#### ①- 5

偏見を障害について持っていたわけではないつもりだったが、どこか少し違う目で見ってしまった部分があったかもしれない。「かわいそう」という風に思ってしまうこともあった。…（中略）…世の中には、まだ過去の私のように、障害についてよく分っていない人もいると思う。障害を持つ人が生きやすい社会になるように、障害について理解されて欲しいと思った。

#### ①- 6

正直授業を受ける前は私も偏見を持っていた部分があります。しかし、授業を受けたり、『障害との共存』読んで、障害を抱えている人の本当の気持ちや思っていることを知り、偏見していることが恥ずかしくなりました。障害を抱えている人は前向きで、誰よりもつよくて、私なんかよりも、ずっと立派な人間なんだなと思いました。

（『障害との共存』はテキスト…筆者附）

#### ①- 7

私は障害について学ぶ前までは、少し偏見を持っていました。なので施設実習に行くのも、ものすごく怖かったり、緊張しました。しかし実際に障害者と関わったり、学校で障害について学ぶことによって障害はその人の個性なのだなと思えるようになりました。

①－ 8

「障害」への偏見が授業を通してなくなりました。同じ人間なんだと広い心でかかわれるようになりました。もっと障害について知りたいと思えるようになりました。障害がその人にとって邪魔なものではなく、それを含めてその人なんだと受け入れる心が大切だと学べました。

①－ 9

障害について何も知らなかったときは、偏見の目で見えてしまう時もありました。ですが授業で学んだこと、実際に施設で体験してわかったことなど、たくさんあります。…（中略）…最初のイメージは全く変わり、電車の中にいる障害をもっている方を見ても「何を考えているのか」「何かしたいことがあるんだな」と優しい目でみられるようになりました。

①－ 10

今までは障害に対して怖いと思ったり、近付いたら何かをされるのではないかと勝手に思ったりして偏見の目を持っていたけど、授業や施設実習を通して、障害はあるけれども同じ人間なのだというふうに考えられるようになった。また障害者の親は自分が想像している以上に様々な面で大変でつらい思いをしているのだということがわかり、心苦しくなった。まだまだ偏見の目で障害者を見る冷たい世の中だけど、私は温かい目で見守るようにしたいし、手助けの必要があれば手をかしてあげたい。

①－ 11

授業のテキスト、実習で学び、障害者への考え方が変わった。最初は「怖い」イメージ

があったが、大きな声を出したり、急に笑ったりすることは「自分の意志を伝えたい」という思いがあることを知った。偏見をもってしまいがちでしたが、私は実習を通して、偏見をもたずにかかわることが大切だと感じた。…（中略）…同じ人として命に大きさはないため、差別してはならない。それぞれ一生懸命生きている。そして、一番思ったことは、健康な身体で育ててくれた両親に感謝すべきだと思う。

①－ 12

障害について、私の印象は「怖い」や人とか違うなど少し偏見もっていました。けれど、講義やレポートを通して、障害をもった人だからと知ってひとりの人間であり、何も怖くないのだと、ただ少し強い特徴、個性がある人なのだと考えるようになりました。

①－ 13

「障害」について、私は今年の8月に行った障害者の施設実習で、障害による偏見をなくすことができました。…（中略）…本人だけでなく、障害を支える家族を支える家族の様子などもこの2つの本（『障害との共存』『僕だって普通に生きたかったよ』）からよく読み取ることができました。

①－ 14

初めは障害に偏見がありましたが、障害にいついて知る中で、偏見がなくなりました。そして障害者も本当に1つや2つの障害をもっているだけで、何も変わらない同じ人間です。障害者の方々が好きになりました。そしてもっと関わりたい、支援したいと思います。しかしもしそれが、自分の子となると…と考

えると自分自身に余裕がないなと感じました。

①- 15

初めは障害を持った人に偏見を持っていた。しかし、授業やレポートを通して障害への知識が身に付き、偏見の目で見るということが少なくなったように感じる。偏見を持っていた頃は、見た目で判断してしまっていて、障害への理解が全くなかったのだと思う。…（中略）…「障害をもっていたとしてもみんなと同じ」という考え方が持てるようになってきた。

①- 16

「障害者」というと特別な感じがして、どうやって接すれば良いかわからなかったり、何となくこわいというイメージがありました。しかし、特別視するのは、自分の中に偏見があったからだと思います。…（中略）…小さいうちから障害＝特別という感覚があるから偏見も生まれ、社会福祉に影響が出てくると思いました。その為に、「皆でお手伝いしようね。困ったときはお互いさまで生活しようね」という感覚が育つような保育を心掛けたいと思います。社会的に低く見るような心を作らせないような幼児教育をして、1人でも多くの意識を変えていけたらと思いました。

①- 17

最初は、障害者に対して偏見など合ったと思います。でもこの授業を受けて、…（中略）…本を読んで、障害について自分が知らなかったことや、障害を持った人の気持ち、周りの家族をサポートするのがどれだけ大変かということがわかりました。私の周りにも障害をもった方がいたら、ぜひサポートしてい

たいと思いました。

①- 18

「障害」は自分には遠いもので、障害を持った方には近寄りがたく、いつも遠巻きで見ているだけでした。自分の中で、障害はよくわからないから、関わらない方が良いと決めつけて勝手に悪いイメージを押しつけていました。けれど、障害を持った方の考えや苦勞を考えることによって、障害を持った人たちも私たちと何ら変わらない「人」であることを改めて認識しました。今では偏見はなくなり、何か助けになれないかなと考えるようになりました。私のようにみんなが障害について知れば、勝手なイメージは減り、障害者にやさしい社会になるのではと思いました。

①- 19

私は今まで、障害を抱えている人は大変で、とてもつらい思いをして生きているのだという自分だけの勝手な見解、先入観、偏見を持っていた。しかし、課題になっていた本を読んで、「障害は個性だ」と述べられた一文が今でも頭を離れない。それと同時に自分の弱さを知った。…（中略）…（障害を）個性の一つとして自分の強みに変えられる、人としての強さを見習いながら、私も今を、これから生きていきたいと感じた。

①- 20

施設での実習をするまでは、正直障害に対して偏見がありました。しかし、知的障害児施設での実習で実際に障害と向き合い、対応の難しさや、障害には人それぞれの程度があることなどを身をもって感じました。

①- 21

「障害」という言葉に初めは偏見をもつ部分もありましたが、講義を通して、また、施設実習に行ってから、その偏見はなくなりました。障害をもつ人、その家族の人も含めて、理解し受け止めていきたいと思いました。

①－22

障害について学ぶ前は、少し偏見をもっていましたが、勉強したり、実際に関わっていくうちに、見る目が変わりました。障害をもっている人でもいいところはたくさんありました。

①－23

講義を通して感じたことは、障害をもっている人のイメージが多く変わりました。障害者への偏見がなくなり、障害についてもっとまなびたいと思いました。様々な障害への援助の仕方や対応も身につけ、支援していきたいと思いました。

以上である。

学生たち率直な気持ちがかかれていいる。講義と課題、実習がそれぞれの役割を果たし、学生たちの意識の変化を引き起こして行ったように感じられる。

この学生たちの生の声にはいくつかの共通点があげられる。

それはひとつには、「認識の変化」と言えるものである。 偏見を持っていたことへの気づき、 偏見の消失もしくは偏見の軽減、「障害」「障害者（児）」へのプラスのイメージの獲得、などが共通して書かれていた。

さらに「知ること」「かかわることの大切さ」に触れている記述がみられた。そして「援助」への前向きな姿勢、と括れる

記述である。

2) 考察

(1) 認識の変化

まず、講義やレポート課題、実習など、学びと体験によって、「障害」「障害者（児）」への偏見がどのように内省されたか、について考えていきたい。

23 人の学生が講義、課題レポート、施設実習によって、「偏見」がなくなった、と感じている。「怖い」「かわいそう」「どう接したらいいのかわからない」「特別な人」という見方をしていた。それが「勝手な先入観」であり、根拠のない「偏見」であることに気づき、「怖い」という感情がなくなっている。それは「学び」がもたらした大きな成果と言えるだろう。

障害特性や対応など知識を深めることや「障害とは何だろう」と考えることにより、また実習で障害者（児）と日々かかわることにより、相手の行動の意味が理解でき「怖さ」が消えたのであろう。そして「同じ人間なんだ」（①－8、①－10）「ひとりの人間であり、何も怖くないのだと、ただ少し強い特徴、個性がある人なのだ」（①－12）「私たちと何ら変わらない「人」」（①－18）と実感するにいたった。

根拠のない「怖さ」は大きな不安となる。そしてその「怖さ」を感じさせる対象を排除しようとする。そこから差別が始まる。「怖さ」への防衛、つまり身を守るための行為であるから、差別をしているものは自身の偏見や行為に気づかない。むしろ正当化しようとする。

人は「知らないこと」「理解できないこと」「自分と違うもの」に対し、不安や怖さを感じ、かかわろうとしない。また。自分から遠ざけ

ようとする。学生たちは「知ること」「理解すること」「かかわること」が、人間理解のもとになることを感じていたことが、各人の記述からうかがえる。

## (2)「知ること」「かかわることの大切さ」

「講義を積み重ねていくにつれて、障害をもったひとと関わり援助していきたいと思うようになっていて、自分でも驚いている。」(①-1)

「もっと障害について知りたいと思えるようになりました。」(①-8)

「授業やレポートを通して障害への知識が身に付き、偏見の目で見るということが少なくなったように感じる。」(①-15)

上記のように、「知ること」「関わるることの大切さ」に触れている記述、「障害」について「知りたい」「学びたい」「障害者(児)」と「かかわりたい」という記述もみられた。

学ぶことにより対象理解が深まる。偏見をなくすだけでなく、対象を身近なことで捉えられるようになっていく。それを表すような記述が下記である。

「自分には無縁のものだと思っていたが、学習していくにつれ、考え方も少しずつ変わっていった。障害は私たちのすぐ身近に存在するものだと思うようになった。」(①-3)

障害は身近なことである、自分のことである、という実感が、「障害とは」や「援助」について深く考えていく姿勢を作っていく。その姿勢を育てていくのが、「教育」の役割であり責務であろう。

## (3)「援助」への前向きな姿勢

「障害」について「知りたい」「学びたい」「障害者(児)」と「かかわりたい」、という気持ち

ちは「援助」への気持ちを引き起こして行ったように思われる。下記のような記述にその気持ちがうかがえる。

「講義を積み重ねていくにつれて、障害をもったひとと関わり援助していきたいと思うようになっていて、自分でも驚いている。」(①-1)

「障害を持つ人が生きやすい社会になるように、障害について理解されて欲しいと思った。」(①-5)

「私は温かい目で見守るようにしたいし、手助けの必要があれば手をかしてあげたい。」(①-10)

「小さいうちから障害＝特別という感覚があるから偏見も生まれ、社会福祉に影響が出てくると思いました。その為に、「皆でお手伝いしようね。困ったときはお互いさまで生活しようね」という感覚が育つような保育を心掛けたいと思います。社会的に低く見るような心を作らせないような幼児教育をして、1人でも多くの意識を変えていけたらと思いました。」(①-16)

「私の周りにも障害をもった方がいたら、ぜひサポートしていききたいと思いました。」(①-17)

「今では偏見はなくなり、何か助けになれないかなと考えるようになりました。」(①-18)

「様々な障害への援助の仕方や対応も身につけ、支援していききたいと思いました。」(①-23)

このように、「障害」に対する偏見が消え、「障害」や「障害者(児)」のつらさや大変さ、障害を抱えて生きる強さを感じ、自分のできることをしてあげたいという気持ちや、社会の

偏見をなくしたい、偏見を持たないこどもに育てたい、教育したいという姿勢が自然に生まれてきたように思われる。

(4) まとめ

知識を深めること、「自分はどう考えるか」考えていくこと、体験すること、そしてそれらが結びついていくことが、「学び」である。

「学び」が学生たちの内省を深め、「自分のなかの『偏見』に気づききっかけとなった。『気づき』により『偏見』が薄れていったことが記述からわかる。

その「気づき」は「学び」への意欲と、自分のできることを援助したいという思いにつながるものになっていくことを示唆している。その芽を開かせるのが、教育であり、教師の責務であるだろう。

6. おわりに

「障害」「障害者（児）」について人ごととしてではなく学び、かかわることは、学生自身の生き方やいままでの人生を振り返るきっかけになったように思う。いまこうして、ある意味普通に生活している、生きていることが、当り前のことではないと感じ、感謝の思いをもった人もいる。考察では触れなかったそのような「声」がある。

「その時に自分は何をするべきか、何ができるのか、など自分にできること、自分の力を支えにしようと思うようになりました。」(①-2)

「“障害”という言葉は決して人を差別する言葉ではない」(①-4)

「障害を抱えている人の本当の気持ちや思っ

ていることを知り、偏見していることが恥ずかしくなりました。障害を抱えている人は前向きで、誰よりもつよくて、私なんかよりも、ずっと立派な人間なんだなと思いました。」(①-6)

「障害がその人にとって邪魔なものではなく、それを含めてその人なんだと受け入れる心が大切だと学びました。」(①-8)

「同じ人として命に大きさはないため、差別してはならない。それぞれ一生懸命生きていく。そして、一番思ったことは、健康な身体で育ててくれた両親に感謝すべきだと思う。」(①-11)

「小さいうちから障害＝特別という感覚があるから偏見も生まれ、社会福祉に影響が出てくると思いました。その為に、「皆でお手伝いしようね。困ったときはお互いさまで生活しようね」という感覚が育つような保育を心掛けたいと思います。社会的に低く見るような心を作らせないような幼児教育をして、1人でも多くの意識を変えていけたらと思いました。」(①-16)

「課題になっていた本を読んで、「障害は個性だ」と述べられた一文が今でも頭を離れない。それと同時に自分の弱さを知った。…(中略)…(障害を)個性の一つとして自分の強みに変えられる、人としての強さを見習いながら、私も今を、これから生きていきたいと感じた。」(①-19)

学生たちの記述を読み直し、筆者自身教えられることが多くあった。「育児は育自」といわれるが、「教育」も他者を「教える育てる」だ

けでなく、教えるもの自身を「教え育てる」ものであるのだろう。またそのように、ともに育ちあうかわりや知識を伝えられることのできる教師でなくてはならないと、自省の念をもった。

今回「偏見」に焦点をあてまとめていったが、学生たちの記述には他にも多くの「気づき」がある。また別の視点から掘り起こしていきたい。

註1) 文献 『ありのままの子育て 自閉症の息子と共に』 を参照。

[ 文献 ]

青木豊 編著『障害児保育』一藝社 2012

明石洋子『ありのままの子育て 自閉症の息子と共に 』ぶどう社 2002 年

真木田清彦『僕だって普通に生きたかったよーある自閉症児の生涯』七つ森書館 2012 年

関谷真澄『障害との共存 精神障害を抱えて生きる』クオリティケア 2013 年

福祉士養成委員会 編著『障害者福祉論 第5版』中央法規 2007